

福津市選択文化財

ふくまうらほんおどり

福間浦盆踊り

〔縦書き資料編〕



【福津市選択文化財とは】

正式名称は「市指定無形民俗文化財以外の無形の民俗文化財の記録の作成等」といいます。市がその内容について記録を作成し保存するべきであると決定した無形民俗文化財のことです。福間浦盆踊りは市にとって重要な民俗芸能であることから令和6年4月25日に福津市選択文化財になりました。

縦書き資料編の内容

今回収集した福間浦盆踊りの唄本の中から、現行の唄本と古い唄本を掲載した。

【現行の唄本】

緑町盆踊り保存会と南町盆通り保存会で現在使用されている唄本の中から、現行の盆踊りで実施している曲目と歌詞のみをそれぞれ掲載した。緑町の唄本は収集資料⑦に同じ、南町の唄本は収集資料⑫に同じものである。

【古い唄本】

福間浦に残されている唄本のうち、緑町、南町に由来する古いものを掲載した。緑町は『昭和五年 ぼん踊うた 第参号』を掲載した。南町は大正十五年の『盆歌』を掲載したが、福間浦盆踊りの代表的な曲目の一部が含まれないため、『福間浦南町区 盆踊り復活教習会』から「高い山」・「お市後家じょう」・「きじの女鳥」の3曲を補完した。

体裁は、概ね各唄本表記のままとしたが、変体仮名表記のものは翻刻し読みやすい表記に変更した。翻刻は、福津市歴史資料室職員の花田洋子氏にお願いした。

【太鼓の楽譜】

太鼓は、緑町、南町とも現行の唄本を利用する形で楽譜としている。両町とも歌詞の右側等に「●」等を記入し、太鼓を打つ数とタイミングを示したものとなっている。現行の唄本として掲載したものと同じであるが、太鼓楽譜はそのものを複写して掲載した。(緑町は収集資料⑦に同じ、南町は収集資料⑫に同じ唄本)

目次(縦書き資料編)

■現行の唄本(緑町)※本番で実施する歌詞のみ
『緑町区 福間浦盆踊り唄』(平成四年) から
お市後家女 一
高い山 一
大井川 一
薩摩薩摩 一
雉のめんどり 一

■現行の唄本(南町)※本番で実施する歌詞のみ
『第七号 福間浦盆踊唄台本 昭和五十四年四月』から
高い山 二
お市後家女 二
宵いや町 二
大井川 二
きじの女鳥 三

■古い唄本(緑町)
『昭和五年 ぼん踊った 第参号』
おいちごけじょ 四
高山 四
きぢのめんどり 四
竹は八幡 五

酒のさの字 五
宵和町 五
雪に宿かり 六
拾貳月 六
坊主山道 七
吉屋結び 七
舟は出て行く 七
なぞ 七
妾が在所 八
笹に雀 八
大井川 八
さつまく 八

■古い唄本(南町)
『盆歌』(大正十五年)
大井川 九
竹わ 九
舟わ 九
宵やまち 十
飴の名物 十
十二月 十
川を 十一
ご繁昌 十一
酒のさの字 十二

■古い唄本曲目補完(南町)
『福間浦南町区 盆踊り復活教習会』(昭和五十年)
高い山 十二
お市後家じよう 十二
きぢの女鳥 十二

■太鼓の楽譜(緑町)
『緑町区 福間浦盆踊り唄』(平成四年) から
お市後家女
高い山
大井川
薩摩薩摩
雉のめんどり

■太鼓の楽譜(南町)
『第七号 福間浦盆踊唄台本 昭和五十四年四月』から
月』から
高い山
お市後家女
宵いや町
大井川
きじの女鳥

■現行の唄本(緑町)※本番で実施する歌詞のみ

『緑町区 福間浦盆踊り唄』(平成4年)

お市後家女(二上がり)一

お市後家女はなあえ、ドッコイ、三年かよたな
かよたそうじやるばい、しるしに子ができた
お市後家女、サアオヤットカカイタ・・・ホイ
様はさんやのなあえ、ドッコイ、三日月さまよな
宵にそうじやるばい、ちらりと見たばかり
お市後家女、サアオヤットカカイタ ホイ

関の地藏さまなあえ、ドッコイ 親よりましよな
七度そうじやるばい、まいれば妻たもる
お市後家女、サアオヤットカカイタ ホイ

沖のとなかになあえ、ドッコイ、新茶屋をたててな
上りそうじやるばい、下りの船を待つ
お市後家女、サアオヤットカカイタ ホイ

高い山(本調子)

高い山から 谷底見ればな ドッコイ
瓜やなすびの花ざかりな アレハサ ヨイヨイ
あの娘よい娘じゃ ぼた餅顔よな ドッコイ
黄粉つけたな なおよかるな アレハサ ヨイヨイ
船の新造と 娘のよいはな ドッコイ
人が見たがる 乗りたがるな アレハサ ヨイヨイ
恋しい小川の 田の水くめばな ドッコイ
たごは漏らねど 袖しほるな アレハサ ヨイヨイ
ここは山中 かたいし所な ドッコイ
油しめ木の 音がするな アレハサ ヨイヨイ

大井川(三下り)

大井川にはいかだを流すソレ
立田川にはな紅葉を流すマカシヨ
そこで二人が浮名を流す オオオソウカイソレ・・・ソレ

三里浜からおいわず見ればソレ
ちらりふらりと千鳥が通うマカシヨ
そこで舟のり漁師が通う オオオソウカイソレ ソレ

ここは名高い新地じやないかソレ
老も若いも砂持ちさせてマカシヨ

客が終ゆりや雲子が騒ぐ オオオソウカイソレ ソレ
橋の上から文取り落しソレ
文は流れる思いは沈むマカシヨ
そこで二人が浮名を流す オオオソウカイソレ ソレ

離れまいぞと約束すれどソレ
縁の無いのか神子の月 ヨマカシヨ
五ツながらも浮名を流す オオオソウカイソレ・・・ソレ

薩摩薩摩(三下り)

薩摩さつまと指しては行けど、いやな薩摩の金山に
ほんにさほんにさアアコリヤコリヤ
なんとしようかいどうしよかい
スツタイヨウニ シヤンセナ

さても恐ろしや虎毛の犬よ、村の庄屋さんに吠えかかる
ほんにさほんにさアアコリヤコリヤ
なんとしようかいどうしよかい
スツタイヨウニ シヤンセナ

肥後の川下によしだが二本、思い切ろよし切らぬよし

ほんにさほんにさアアコリヤコリヤ
なんとしようかいどうしよかい

スツタイヨウニ シヤンセナ

薩摩さきの津に御番所がなくは連れて行きたや鹿児島に

ほんにさほんにさアアコリヤコリヤ
なんとしようかいどうしよかい
スツタイヨウニ シヤンセナ

ここに繋ぐな はづなも取るな 肥後の高瀬が来て繋ぐ

ほんにさほんにさアアコリヤコリヤ
なんとしようかいどうしよかい
スツタイヨウニ シヤンセナ

雉のめんどり(三下り)

雉のめんどり 小松の下で、
妻をたすねて ほろろうつ
アアドッコイテイソ

様はよかるぞえ、ホッカラカイテコイコイ

踊りおどらば 小寺の壺で
踊るかたてに後生をねがう
アアドッコイテイソ

様はよかるぞえ、ホッカラカイテコイコイ

恋をめさるなら 薬師堂でめされ、
薬師や木仏でもの言わぬ
アアドッコイテイソ

様はよかるぞえ、ホッカラカイテコイコイ

金の座敷でも 一人寝はいやよ、
様と二人寝の膝まくら
アアドッコイテイソ

様はよかるぞえ、ホッカラカイテコイコイ

博多小女郎がハイもろた子を見やれ、
二重瞼にもろえくぼ
アラドッコイティンヨ

様はよかるぞえまホツカラカイテコイコイ

祝い目出度のハイ若松様よ、
枝も栄ゆりや葉もしゅける
アラドッコイティンヨ

様はよかるぞえまホツカラカイテコイコイ

■現行の唄本(南町)※本番で実施する歌詞のみ

『第七号 福岡浦盆踊唄台本 昭和五十四年四月』

高山 本調子

- 一、高山から谷底見ればなードコシヨイ
瓜やなすびの花盛りな
あれはさーよいよい
- 二、沖の中の三本竹はな
うまず竹やりや子がさかぬな
あれはさーよいよい
- 三、関の地藏さんは親よりましょな
一度参れば子がたもるな
あれはさーよいよい
- 四、安藝の宮島まわれば七星な
浦は七浦七恵比須な
あれはさーよいよい
- 五、小石小川のうの島見ればな
小ぢなくわえて瀬をのぼるな
あれはさーよいよい

お市後家女 二下り

- 一、お市後家女はな一えアードッコイシヨイ
三年通うた通うたそうじやろ
ばいしるしに子が出来たお市後家女
さまやつとかかえた アードッコイシヨイ
- 二、志賀の島出でな一えアードッコイシヨイ
奈多浜行けばいとしようじやろ
ばいとこの相の島お市後家女
さまやつとかかえた アードッコイシヨイ
- 三、安藝の宮島な一えアードッコイシヨイ
廻れば七里浦はそうじやろ
ばい七浦七恵比須 御市後家女
さまやつとかかえた アードッコイシヨイ
- 四、博多御女郎はな一え アードッコイシヨイ
もちなこと云やるな一ふたえそうじやろ
ばいまふたにもろえくぼお市後家女
さまやつとかかえた アードッコイシヨイ
- 五、あの子良い子よな一えアードッコイシヨイ
ぼたもち顔よな一きなこそうじやろ
ばい付けたらなおよかるお市後家女
さまやつとかかえた アードッコイシヨイ

宵いや町 本調子

- 一、宵いや町く夜中もすきて
引く三味線は アードッコイシヨイ
思わば相とぞ相の山
おうこれ手を取る手柄山
お茶菓子に花みどり
- 二、恋しくばく尋ね来て見よ
いずみなるアードッコイシヨイ
篠田の森のまもり神
ほおそはやすなの與勘兵衛
お茶菓子に花みどり
- 三、今宵こそくねずみこそつく
晩じやらアードッコイシヨイ
さてこそようこそねられこそ

四 どうしたこそつく晩じやら

- 一、お茶菓子に花みどり
色くらべく京で島原祇園町
大阪で新町島のうち
お江戸で吉原栄町
お茶菓子に花みどり
- 二、田舎にてくはでな娘の厚化粧
素顔で会うたらなんじやら
風呂屋のないでござんしょう
お茶菓子に花みどり

大井川 三下り

- 一、大井川にはいかたを流す
龍田川には紅葉を流す
共に二人は浮名を流す
おゝそうかいな
- 二、石堂橋から柳町見れば
女郎やからむろがな、やたらにさわぐ
上げたお客が浮名を流す
おうおそうかいな
- 三、橋の上から文取り落す
文は流れるな一思は沈む
吾は君故浮名を流す
おうおーそうかいな
- 四、此処は名高い新地じやないか
老いも若きもな一妻もち盛り
ちらりくと千鳥が通ふ
おうおーそうかいな
- 五、福岡棧橋渡れば長い
長い話もな一つきないうちに
何時か二人が浮名を流す
おうおーそうかいな

(井原元彦作)

きじの女鳥

一、きじの女鳥やオイ小松の下で

妻をオイたづねて、おろおろと

アリヤドツコイテイシヨ

様がよかるぞいな

さほからかいてコイコイ

二、博多御女郎はオイもちな事云いやる

二重オイまぶたにもろえくほ

アリヤドツコイテイシヨ

二重まぶたさ

さほからかいてコイコイ

三、あの子よい子よオイぼたもち顔よ

きなこオイ付けたらなおよかる

アリヤドツコイテイシヨ

様がよかるぞい

さほからかいてコイコイ

四、関の地蔵さんオイ親よりましよ

一度オイ参れば子がたもる

アリヤドツコイテイシヨ

様がよかるぞい

さほからかいてコイコイ

五、こちらの座敷はオイ祝の座敷

鶴と亀とが舞いあそぶ

アリヤドツコイテイシヨ

様がよかるぞい

さほからかいてコイコイ

21

22

23

24

25

26

27

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

■古い唄本(緑町)

『昭和五年 ぼん踊った 第参号』

おいち(けい)	二上り	一
竹は八幡	三下り	三
高山	本調子	五
酒のさの字	三下り	七
宵和町	本調子	九
雪に宿かり	二上り	十一
拾貳月	本調子	十三
坊主山道	二上り	十五
吉屋結び	二上り	十六
舟は出て行く	本調子	十七
なぞ	三下り	十九
妾が在所	三下り	廿一
笹に雀	三下り	廿二
大井川	三下り	廿三
さつげのこま	三下り	廿四
きりのめんどり	三下り	廿五

後家女
おらち(けい) (二上り)

後家女 一え
「おいち(けい)なめあ 三年かよたな。
なまうたさうじ(けい)は、しるしに子がで
きた。

三夜 三日月様 宵
「おまは、なんやの。みかづきのまよ、よ

見
いに、ちちりと。みたばかり。

関 地藏様 親
「せきのし(けい)ま。おやよりましよ。

高山(本調子)

1 子(娘)良子(娘) 餅顔
「あのよ(けい)じや。ほたもちがよな。
黄粉 良

きなこつけたな。なおよかろな。

2 船 新造 娘 良
「ふねのしんぞと。むすめのよいはな。
人 見 乗

ひとがみたがる。のりたがるな。

3 小石 小川 田水 汲
「こいし(けい)がわの。たのみつくめばな。
漏 袖

たこはもろねど。そでしほるな。

4 此処 山中 (権の美) 処
「こ(けい)はまなか。かたいし(けい)ごな。
油 木 音

あぶ(けい)めきの。おとがするな。

5 「おきなとなかの。さんぼんたけはな。
うまつたけやち。こがさかぬな。
三本 竹

咲 桜 何故 駒繫
「さうた(けい)くらに。なせ(けい)まつなくな。
駒 勇 花 散

こまがい(けい)めは。はな(けい)ちるな。

8 関 小刀 身細
「せきのこ(けい)がたな。みはほ(けい)けれどな。

切 想 深
まれたおもいが。ふ(けい)ぞるな。

6 不産 竹 私 無
「うまつたけ(けい)は。わ(けい)なけれどな。
潮 揉 子

し(けい)もまれて。こ(けい)かぬな。

「き(けい)ま。ま(けい)の(けい)に。こ(けい)はん(けい)し(けい)が。なく(けい)はつ(けい)れ
てゆ(けい)きたや。か(けい)しまに。

「こ(けい)に。つ(けい)な(けい)くな。は(けい)な(けい)も(けい)と(けい)る(けい)な。ひ(けい)の(けい)た
かせ(けい)が(けい)きて(けい)つ(けい)な(けい)く。

「き(けい)し(けい)ま。ま(けい)へ(けい)う(けい)じ(けい)ま。み(けい)こ(けい)な(けい)し(けい)ま。地(けい)から
は(けい)え(けい)た(けい)か。う(けい)き(けい)し(けい)ま(けい)か。

きりのめんどり

「き(けい)の(けい)め(けい)ん(けい)ど(けい)り。こ(けい)まつ(けい)の。し(けい)た(けい)て。つ(けい)ま(けい)を。
た(けい)な(けい)て。ほ(けい)ご(けい)う(けい)し(けい)。

「お(けい)ど(けい)り。お(けい)ど(けい)り(けい)は。お(けい)ど(けい)り(けい)の(けい)う(けい)風(けい)づ。お(けい)ど(けい)り
か(けい)た。手(けい)に。こ(けい)し(けい)ま(けい)を(けい)お(けい)か(けい)ろ。

「こ(けい)い(けい)を。め(けい)な(けい)る(けい)な(けい)り。や(けい)へ(けい)し(けい)て(けい)う(けい)て。め(けい)さ(けい)れ
や(けい)く(けい)し(けい)や。き(けい)ほ(けい)と(けい)けて。も(けい)の(けい)い(けい)わ(けい)る。

「ま(けい)ん(けい)の(けい)き(けい)て(けい)ま(けい)で(けい)も。ひ(けい)と(けい)し(けい)ら(けい)ね(けい)は(けい)や(けい)や(けい)の(けい)き(けい)り(けい)の(けい)ま(けい)つ(けい)た(けい)か(けい)ら
たり(けい)ね(けい)の。ひ(けい)き(けい)ま(けい)へ(けい)り。

「は(けい)か(けい)た(けい)こ(けい)じ(けい)よ(けい)ろ(けい)が(けい)も(けい)う(けい)た。こ(けい)を(けい)み(けい)や(けい)れ。ふ(けい)た(けい)へ
ま(けい)た(けい)に。も(けい)じ(けい)ま(けい)く(けい)ほ。

「い(けい)わ(けい)い(けい)め(けい)で(けい)た(けい)の。わ(けい)か(けい)ま(けい)つ(けい)ま(けい)ま(けい)よ。え(けい)た
も(けい)さ(けい)か(けい)ゆ(けい)り(けい)や。は(けい)も(けい)し(けい)ゆ(けい)る。

竹は八幡(三下り)

竹 八幡 八幡様 二神

「たけは、やわたのはちまんさまのこしん

木 見事 伸 伸 竹

ぼく。みことにぬんだとき、ぬんだそのた

雪

けは。どうぞいな。ゆきに、もたれてしよ

朝日

んほりと。あさひさす、おきんずの

が(う)ごる。ちよせんのとっけいし。

しやくや、はらいたみや。きみょうぢや。

藤 福間 宮様 御神木

「ふじはふくまのおみやさまのこしんほく

見事 咲 藤

みことに、さいたとき。さいた、そのおじや。ど

堀

うぞいな、たなに。もたれて、しょんほりと。

杉 田島 宮様 御神木

「すぎは、たしまのおみやさまの、こしんほく。

見事 伸 伸 杉

みことに、ぬんだとき、ぬんだそのすぎや。ど

堀

うぞいな、ほりに、あいして、しょんほりと

桜 宮地 宮様 御神木 見

「さくら、みやじのおみやさまの、こしんほく。み

事 咲 咲 花

こくに、さいたとき、さいたそのはな。どうぞ

池

いな。いけに、あいして、しょんほりと

高砂屋上 松

「これは、たかさおのおのゑの、まつじゃないか。

見事 伸 伸

いな、みことに。ぬんだとき、ぬんだその

松 年

まつ、どうぞいな。とくに。ふられてしょんほりと

梅 宰府 天神様 御神木

「うめは、さいふのてんじんさまの、こしんほく

見事 咲 咲 梅

みことに、さいたとき。さいたそのうめは。

堀

どうぞいな。かきば、もたれて、しょんほりと。

酒のきの字(三下り)

酒 字 酒屋 字 酒 漏

「さけのさのちは。さかやの、さのち、さけは、じ

斗 葦笠 漏斗 酒

よこのみのかさで。じょうこの、さけわいな。

酒 漏斗 葦笠 〇〇〇〇 見度

さけは、じょうこの、みのかさで。さかほて、みるた

思 出

びおもいだす。

〇〇 〇 〇〇〇 〇 字 染

「さるの、さのちは、さるまの、さのち、おそめ

久松 〇〇〇〇 久松 染

ひさまつ。ゆてなもの、ひさまつ、おそめいな。

染 久松 染

おそめひさまつゆてなもの、おそめ

言 一寸 出

といふたら。ちよいとでた。

〇〇 勤平 主人 為 妻

「はやのかんべい。しゅじんの、ために、つまの

〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇 妻

おかるに。つとめさせ。おかるの、つまのいな。

妻 〇〇 〇〇〇〇 主人

つまの、おかるに、つとめさせ。しゅじんの

為 仕方

ためなら。しかたがない。

色 字 字 鱒

「いろのいのちは。いろはのいのち。いっそ、いわ

入袋 鱒 入

しの、いれぶくろ、いわしのいれぞいな。いっそ、

鱒 入袋 沖 鱒

いわしの、いれぶくろ。おきからいわしが

一寸 出

ちよいとでた。

酒 飲 酒代 持 飲

「さけは、のみたし、さかだやもたぬ。のんで

ゆられる、ゆらのすけ、ゆられる、ゆらのす

飲 由良 助 由良 助

けのんで、ゆられる、ゆらのすけ。われ

飲 〇〇〇〇

らがのんでは、たわいがない。

宵和町(本調子)

宵 待々々 夜中 過

「よいわまちく。よなかも、すぎて、ひくさ

みは。おもゑは、いとど、あいのやま。ふみは、

吉野 花 盛 山 文

よしのの、はなざかり。

色 々々 京 島原 祇園町

「いろくちやく。きょうで、しまはら、ききんまち。

大阪 新町 島内 江戸 吉
おさかぞ、しんまち。しまのうち。おまどぞ、よし
原 塚町
わら。なかいちやう。

今宵 々々 鼠 晩 ○○○○
「こまら、こそく。ねづみ、こそつく。ばんじややら。」

なでこそ、ようこそ、ねられこそ、どうした。

晩 ○○○○
こそつく、ばんじややら。

如何 々々 派手 姿 厚化粧

「いかなにてく。はでなすがたの。あつけしよ。」
門 遣 何 ○○○○ 風呂屋

かどで、おをたが、なんじややら。ふうやの。

ないので、こそんしょう。

塩屋 々々 派手 姿

「志をやく。はでなすがたの。にないや。」

なでこそ、ようこそ、やまばかり、どうした。う

そつく、しむややら。

恋 々々 篠田 森 守

「こらしくばく。しのたの、もりの、まもり
神 保名
がみ、こそさは。やすなの、よかんてい。

雪に宿かり(二上り)

雪 宿 時頼 入道 西

「ゆきだ、やどかむ、とまより、にやうとほ。さび
妙寺 梅 桜
みようて、うめよ、なぐさよ、まじたく。

常世 座敷 假宿 常世 座

「おまが、おしきの。かりのやど。おまが、お

敷 假 宿 梅 桜
しまのかりのやど。うめよ、なぐさよ、まじたく
常世 座敷 假宿
けつねよが、さしきのかりのやど。してな

ふきは、○のかしの、は、

曾我 兄弟 富士 裾野 討
「そがのきよだい。あちのすそのの、かたき

打
うち、とらが、おといの。なみだに。し。

少 夜 雨
うすくしは、よるのあめ。

槍 々々 素槍 長槍 十丈
「やりもだんく。すやり、ながやり。ちやもん

字
くじ。やりてことありこむ。わたしの、すくの

くが、おをとりけ。

今宵 忍 養 笠着 忍

「こまら、みのとかさきて。しのはんせ。

人 誰 言
ひとが、たれじやと、ゆうなら。まなやす

くじやと、いわしやんせ。

今宵 忍 浴衣 一重 忍
「こまら、ゆかた、ひと忍でしの

人 誰 言
はんせ。ひとが、たれじやと、いふなら。ま

屋 何処 言
やは、どこじやと。いわしやんせ。

今宵 忍 猫 真似 忍

「こまら、ねこのまねして。しのは

猫 傘 ○○○○
んせ。ねが、かささし。ほつくりはいて。

「みやは、こ。せたらおうて。しのはんせ。

拾貳月(本調子)

明 初春 恋 宇帆

「あけてはつはる、はつかいに。こひといふじにほを
揚げ 客 乗 宝 船
あけて。きやくを。のせまず、たからるね。

最早 如月 客 待夜

「もはや、もんびの、きんらぎの。きやくをまつよ、の

その長 道理 今年 寅 年
そのながさ。どうりで。ことしは、とらとし。

桃 桜 色 比 袂

「ももと、さくらの、いろくらべ。かしくが、たもと

詰袖 爐 文 入
つめそでの。うれしや。ふみの、いれどころ。

嫁 夜 床 中 濡 姿
よめにしたぬの。とこのうち、ぬれたすがたで。しっぱ

りと。どうやら、おしやかを。みるような。

初手 真 後 嘘 二世 三世
「しよてのまことは。のちのうそ。にせも、さんせも。

「ちつみかき。とをりて、さつきのせつじやもの。

今 野 出 月 清水 許 忘
「いまは、のにてて。みなつきの。しみすがもとに。わ

傘 熱 忍
すれがさ。あつさを。しのんでいたわいな。

旦那寺 是非 思
「だんなでらなら。せひもなや、おもひがけなや。

帆 心 拜
ほを、しやいで。こころで。おがんで。いたわいな。

見 羨 八山沖
「あれみやしやんせ。うらやまし。やつやまおまの

かものさく。つがいはなれぬ。みよとづれ。

恋 枯木 花 咲 花 菊
「こいのかれきた、はなまかせ。すいつきはなや、ま
心 愛
くのまけ、こころで。あいしていたわいな。

凜気 口説 中 位

「りんぎくせつ。そのなかに、わしやなくまいと、
思 涙 合点
おもへども、せまくなるなみだがかてんせぬ。

愛 可愛 寝 雪 降 朝

「いとしかわいと、しめてねて。ゆきのふるあき。いな
涙 解
すのが、なみだや、つらや。とけやちぬ。

々々 皆 私

「みまはくのおぢもんに、みなさん、わたしはこの
幕 廊 離 夫婦 連
くれは。くるわを。はなれて、みようとつれ。

坊主山道(二上り)

坊主 山道 破 衣 行 帰
「ほろやまみち。やぶれた。こども、ゆくもが
木
へるも、まにかいる。なんの。

夏 来 笠 買

「なつがきたなら、かきこらて、たもれ。
恋 陽 焼
いに、こがれぬひなやけす。

煙草 度々 意見

「たはこのむなど。たひく。いけん、つとめ
忘 草
するみの。わすれぬ。

恋 々々 啼 輝 啼
「こいしくと。なくせみよりも。なかなほ
笛 身
たるが。みを、こがす。

嫌 廊 曲 築

「いやなくるわや。わしやはそめて。み
笛 積 雪 葉
みた、つむゆき。ほをからす。

吉屋結び(二上り)

「しよのあいつに、かならず、じゃぞえ。
「まぢや、むすびの、おひまで。とかせ、それだ、こん
とは。どうしたりくつぢや。しやほんも
な。おもわせりかそれに、こんとは。どうし
たりくつぢや。しやほんも。

「まつを、あいつに、かならず。ぢやぞえ。
「はしよを、みたてて、まくまで、うたせそれだ。
こんとは。アどうした。りくつぢや。

「志まし、あいつに、かならず。ぢやぞえ。
「あほし、かりまぬ。ぬかして、おいて、それに。
こんとは。どうした。りくつぢや。

舟は出で行く(本調子)

「舟は、さでゆく。ほかけてはしる。ぢややのむすめ
が、こてまわく。まねけど、いそに、おらはこそ。おも
ひきれとの。かせがま。

「まは、やえまへ。まへは、なへ。なせに、あまが
ほ、ひとへまへ。わたしや、おひがき。なまれぬ
ひすまへ。まへへ。

「あわれ、なるかや、ままへおや。むすめ、こころ
のひとすじに。はる、くたね、まらじの。そらな。
なみだの、たねとなる。

「あわれ、まよつと。いもとは、まどに。おやは、なが
なき。まるやまに。なんのいんがで。このように。はな
ぢやなけれど、ちり、くと。

「まきを、からすと、いふたか、むりか。あをいのはな
も、あかくまへ。いちほのとりを。にはとりと。
ゆきといふじを。すみでかく。

「あわれ、なるかな。あだちがはらよ。いこまのすけ
と、こころまぬ。に世のましよを。とりかわし。志らぬ
あひま。おちてゆく。

なぞ(三下り)

「これな、もうし、だんなさま。なぞ、かけよじや、あ
るまいか。わが、ひよどかけてはな。それは、ひ
だ、と、と、わいな。その、こころ、じやあ、かみまり、に、く
いと、い、こころ。

「これな、もうし、いんきよさん。なぞ、かけよじや、あ
るまいか。しよきのしぢやと、かけてはな。それは、
ゆきまるかしたと、その、こころ、じやあ、を、
つめたいぢやと、い、こころ。

「これな、もうし、すけへさん。なぞ、かけよじや、あ
るか。うわまおんなどかけては。なそれは、い、しよ
た、と、と、その、こころ、じやあ。かたむきやすいと、
い、こころ。

「これな、もうし、こどもしよさん。なぞ、かけよじや、あ
るまいか。むひんちん、かけてはな。それは、ほうねん
あま、と、と、その、こころ、じやあ。かりくちあかぬと
い、こころ。

■古い唄本(南町)

『盆歌』

「大井川」

一、大井川にはいかだお流す
龍田川には紅葉お流す
共二人ハ浮名お流す

一、くせつすまいと思つていたが
おんの無のが、かみこの月で
いつになれては、別が早
おおそふかいなあー

一、石道橋から柳町見ればな
女郎かむろがやたらにさね
ぐ揚げた御客が浮名流す

一、橋の上から文取り落す文ね
流れる思わ沈む吾わ君故
浮名す

一、此処名高きしんぢやないか
老も若きも、すなむお盛り
さつりさつり千鳥か通

「竹む」

一、竹む八幡の八万様の御シンぶく
見事に延んだと延んだ其竹
とうぞいな雪にあいしてよんは
りとあぢひまきちうお書さんじの
かめじさるちゆうせんなど
うけいし。しやくやはらためや
きめうじや

「櫓」

一、杉は田島の大宮様のしんぶく
見事に延んだと延んだ其の杉櫓

とうそいな。ほりにあいしてしんほ
りと

一、是む高砂屋上松じやないかいな
見事に延んだと延んだ其松ど
うそいなほしにあいしてよん
ほりと

一、藤は播磨の明神様しんぶく
見事に咲いたと咲いた其藤
とうそいな松に抱れてよんほりと

一、梅はさむの天神様の御神木
見事に咲いたと咲いた其梅
とうそいな垣にもたれてよん
ほりと

一、松は緑の福岡浦の御神木
見事に延んだと延んだ其松
松どうそいな月にあいしてよんほり

「舟む」

一、舟わ出て行くはかけて走る
茶屋の娘が出てまねくまねけど
磯に寄らばご思切れとの風か吹く
そらまたほんかいなあー

一、花は八重咲く櫻も八重おなせに
朝顔一重咲く、わしわ照日に憎
れで朝日さすまで一重咲く
そらまたほんかいなあー

一、君わながかれ千草のむすめ
竹のおわしはまだわ鶴の
すこもり松の色

波は千年の祝かい

一、今宵一夜お月様お出て下さるな

夜明まで明へし月夜に恨ある
しばししの夢にしのはれぬ
そらまたほんかいなあー

一、姉わ京都に妹は江戸に親は
長崎丸山になんの因果で此ノ
やうに花じやなけれと散り散りと

一、哀れなるか安達原よ、いこまの
すけと、こきめわ二世きせよ
も取換し知らぬ東におちて
行く そらまたほんかいなあ

一、一人り娘とおとろし煙草と
圍過してひねとるひねの
煙草と夏の夜は。のみか憎でかが
わる

一、さきを鳥と言ふたが無理かあ
いの花も赤く咲く。いちわの鳥を
二羽鳥と雪と言ふ字を墨で書く

一、恋の三味線引きやうかきさる
一をゆるめて二をべて調子合
せて。しのび駒はたむ。くせ
おからする

一、憐なるかや與茂作親子
娘心の一筋にはるはるたづね
まいる。それは涙の種なる

「首やまき」

一、よいや町よいや町夜中も過ぎて
引く三味ね思わばあいと香相山
残れ手を取る手柄山
お茶菓子に花みとり

一、恋しくは恋しくは暮れ来て見よ
いずみなる篠田森の守神
ほおそわ。やすなのよかん兵衛
お茶菓子に花みとり

一、塩や塩やはでな姿のいな
振り思へばいと名山ばかり
みわよし野の花盛り

一、夢に見て夢に見てうつつ二でおおた
わ、まほろしやたつかいもない、いも
せとりつかいはなれぬ後や先

一、今宵こそ言ひかねつみこそつく
晚じややらきてこそまよふこそ
ねられこそろつしたこそつく晚じややら

一、田舎にてははれぬ娘の厚

化粧す顔れまたわ何んじやら
風口屋の無のてつらんしよ

一、色競世錦京で島原。祇
園町大阪で新町島の内
お江戸で吉原栄町

一、思ふとわが口偽りの捨言葉
思わぬ君のうちのしや
文わ所のもの味のながしいこと
わいなあー

一、勢田橋勢田橋月は石山。三井の

鐘かたの浦の比奈雪。水
に穿るうせいのしる唐崎一ツ松

「飴の名物」

一、飴の名物板に延べ飴板飴
いとし殿子の袖を引き飴ぬ

しりと見たれば笑しやく飴残れ
手を取れ手柄飴またあら飴犬

ほへるもにくや棒飴たたきつけ
られよいやさあーさあー

一、角力ひいきわ實に福川千田
川舎田山でわたのよたけや
ぐらなげかけ岩井川残れ荒磯
荒い川又ちくしゅうれ四十八手は

裏と表を土儀際にてヨイヤサアノサア

一、花は桜木、木ね又樽木人は武士

大和ことばわた恋の手習。都女郎しづ
名をえたり残れ大坂わ茶屋し
だいとお江戸わ花ノ吉原文の取
やり店のすかきで
よいやサアサア

一、関の角力わ實に名山大井さば
とまがしまから稲の谷風江戸崎
から唐崎残れ名取ん手柄山
又朝日山土俵入りこそはれに
とりとり四ツで組みよせ
よいやサアノサア

今日戦はお城土産に天魔天神
みどうすし残れ竹田む面白や
又阿味陀池かへりつなばにうとん
そばきりこれも名物
よいやサアサア

一、関の芝居わしがらんひちの
興茂作か田植中に切り殺れて
妹とおしのぶわ泣き倒れ残れ庄屋
かおなれば又仇討師のみ
やきぬ心を合せてだだの仇を
よいやサアサア

一、花の盛りわかねのくようのひら
か川なんぼに惚れしやんしても
娘の盛りわおになれ残れざまん
ばざだんだわしやしやになってし
んこんひみつをーくりかけくり
かけじゆうすのなるほと
よいやサア

「十二月」

正月 明けて初春初恋の恋と云々
字に帆を揚げて客を乗せませ
三冊 ヤレーソレソレヨイヤア

貳月 最早紋日の如月の客を待つ
夜の其の長さ道理で今年は
寅年ヤレーソレソレヨイヤア

参月 桃と桜の色競べかしくが

たもと、つめ袖の嬉しや文
の入所 ヤレソレヤレソレヨイヤナア

四月

嫁りしたよのこの内ぬ
れた姿しよんぼりとごうやち
御しやかを見る様に
ヤレソレヤレソレヨイヤナア

五月

そのまことわのちのうそ
二世も三世もしつをかき道
理で五月の節じやもの

六月

いまわ野に出てみ月
みすがもとのわすれがさ暑
さをしのんでみたわいなう

七月

だんな寺ならせひもなや思
掛なやほうしやみていで
揮てみたわいなう

八月

あれ見やしやんせうちやまし
やつやまおくのかめさへ
つかいはなれぬ夫婦連れ

九月

恋の枯木に花咲せすいつき
花や菊の酒心で愛して香む
わいなう

拾月

りんぎせつの中になし
わなくまうと風共せまける
涙ががてんせぬう

拾一月

恋しかわいとしめてねで
雪の降朝いなんすのわ
涙のつらやアとけあられ

拾二月

さらばさらば大もんじみなき

「川を」

一、川を經ていもせ山鹿の鳴く音
を友として川を懸へは淵となる
きよふねさんひなとりさん
こひなかと思わんせ

二、此れ昔あくた川桂川に身を
流す泡と消行くしなのやの
お半さん長右エ門さん恋い仲と
思わんせ

一、きしようせいしてそわりよう
なら恋の手習ひなきせう
おむねに種わ白木屋のお駒
さんさいざさん恋仲と思わんせ

一、晩の約束忘れまい鐘の鳴る
時出てこされほんに女わいや
なものうそつきさんうそつきさん
だまされてみたわいな

一、一谷から落ちて四国八島の
段の浦今日戦武者所
熊谷さん敦盛さん敵中と思わんせ

一、竹のちぎりによをこめてね
しがめざきを打明けて二人が中
もんちくばかよいじや小笠又
いいさがましのたけ

一、なみわなよせのはなかいの
ちらと見染めし姫貝のすそ
をほら貝吹きあげて姫貝
いたら貝をよと待てとわい貝

一、五尺手拭今よりも今わ二人が
四ツの袖沖の石程めれて見
よ鐘かなる鐘かなるきぬぎぬのが

た袖を

一、恋のかけ橋渡りその

見るようおの嬉しき戦の舟

やま鳥東雲さん東雲さんまだ四ツ

しやと思わんせ

「」警昌

一、きみやう、つんと今日お造で
しらはのお娘めしらはのお娘め何時の
間にやら黒く黒るとかねをつけ
よおい嫁子にならしやんせそんで
わおきな御警昌

一、春わおはばにきをのせてきをのせて
とらんぎ参りに腰をのせ、しわを
のせようおいのせてにならしやん
せ

一、夏わ娘に越後を着せて越後を着せて
しゆうすの帯さじゅんわりとへて
やれよおい手にならしやせ

一、秋わ田の中丸月よまん丸月よ
すいな顔してだいたんをやめに
して(よいい)嫁子にならしやんせ
一、冬わ子供に花足袋はかせ花足袋はかせはづ
れそうなら気を付てはめてやれようおい
はめてにならしやんせ

「酒のさの字」

- 一、酒のさの字は酒屋のさの字
酒はしようこのみの傘でしよう
この酒わいな酒わしようこのみの
傘で我等か呑んでわしようことか
ない

- 一、色のいの字わいろはのいの字
いつも鰯の入袋鰯の入れせ
いないつも鰯の入れ袋ろ
沖からいわしがにゆうとれた

- 一、猿のさの字わさるまやアのさ
のお字おそめ久松ゆてた
もと久松おそいなおそめ
久松ゆてたもおそめとよん
ただはいとれた

大正拾五年

田畑磯五郎
廣渡竹五郎

古い唄本曲目補完(南町)

『福間浦南町区 盆踊復活教習会』

高い山 本調子

- 一、高い山からア 谷底見ればアなードッコシヨイ
瓜やなすびの花盛りな
あれはさ おいよ
- 二、沖のど中の 三本竹はなードッコシヨイ
うます竹やりや 子がさがぬな
あれはさーおいよ
- 三、うます竹では 私しやなけれどな
汐にもまれて 子が味かぬな
は水はさーおいよ
- 四、関の地藏さんはア親よりましよなードッコシヨイ
一度参いればア 子が保るな
はれはさーおいよ
- 五、安藝の宮島 まわれば七里な
浦は七浦七恵比須な
はれはさーおいよ
- 六、小石小川のオウの鳥見ればなードッコシヨイ
小ぶなくわへて瀬をのぼるな
はれはさーおいよ
- 七、此ちの座敷は祝の座敷なードッコシヨイ
鶴と亀とがア舞ひあそぶな
はれはさーおいよ

お市後家じょう 二上り

- 一、お市後家じよわ なーえドッコシヨイ
三年通ふたナアア通ふたそうじやろオ
はいしるしにイ子が出来た
- 二、お市後家じょう サマヤアトカカエタアードッコシヨイ
志賀の島出でな
奈多の浜行けばいとしようじやろ
はいとのこの 相の島
- 三、安芸の宮島 なーえ
廻れば七里 浦わそうじやろ
はい七浦七恵比須

四、博多鶴じよるは なーえ
むちなこと 云やろな
ふたえそうじやろ
はいまふたに もろえくほ

五、あの子良い子よなードッコシヨイ
ぼたもち顔よな
きなこそうじやろ
はい付けたらなをよがる

六、此ちの座敷はなードッコシヨイ
祝ひのさしきな
鶴とそうじやろ
はい亀とが舞いあそぶ

きじの女鳥 三下り 坊主

一、きじの女鳥や 小松の下で
妻をさがしておろおろと
アリヤドッコイ
がよがるぞいな

二、さきを鳥と云ふたが無理かな
アリヤドッコイ
一羽の鳥でもにわとりと
ゆきと云ふ字おは墨で書く
さほからかいて墨で書く

三、福間玉せり た丸裸
アリヤドッコイ
若いとのこが玉をばせと
昔つたへのさ

四、博多おじよるはもちな事いや
アリヤドッコイ
二重まをたに もろえくほ
二重まをたに
さほからかいてコイコイ

五、あの子よい子よ ぼたもち顔よ
アリヤドッコイ
まなこ つけたら なをよがる
様がおがるぞいな

六、関の地藏さん 親よりましよ

アリヤトソコイ
なもる

一度参いれば
様がおかろぞい

七、此の座敷は 祝の座敷

アリヤトソコイ

5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

お市後家女(二上がり)

お市後家女はなあえ トッソイ、三年かよたな

かよたそうじやろばい、しるしに子ができた

お市後家女、サアオヤットカカイタ……ホイ

様はさんやのなあえ、トッソイ、三日月さまよな

宵にそうじやろばい、ちらりと見たばかり

お市後家女、サアオヤットカカイタ……ホイ

関の地藏さまなあえ、トッソイ、親よりまよな

七度そうじやろばい、まれば妻たもる

お市後家女、サアオヤットカカイタ……ホイ

沖のとなかになあえ、トッソイ、新茶屋をたててな

上りそうじやろばい、下りの船を待つ

お市後家女、サアオヤットカカイタ……ホイ

恋し小川のなあえ、トッソイ、うの鳥見やれな

小鮎こなそうじやろばい、くわえて瀬をのぼる

お市後家女、サアオヤットカカイタ……ホイ

紺の前かけになあえ、トッソイ、松葉のちらしな

まつにそうじやろばい、んとは辛うござる

お市後家女、サアオヤットカカイタ……ホイ

志賀の島でてなあえ、トッソイ、奈多浜行けばな

いとそうじやろばい、殿御に相の鳥
お市後家女、サアオヤットカカイタ……ホイ

高い山 (本調子)

高い山から 谷底見ればな

ドッコイ

瓜やなすびの花さかりな

アレハサヨイヨイ

あの娘よい娘じゃ ぼた餅類よな

ドッコイ

黄粉つけたな なおよかな

アレハサヨイヨイ

船の新造と 娘のよいはな

ドッコイ

人が見たがる 乗りたがるな

アレハサヨイヨイ

志し小川の 田の水くわはな

ドッコイ

たごは漏らねて 袖しぼるな

アレハサヨイヨイ

ここは山中 かたい 芥な

ドッコイ

油の木の 音がするな

アレハサヨイヨイ

沖のとなかの 三本竹はな

ドッコイ

生ますだけやら 子が咲かぬな

アレハサヨイヨイ

咲いた桜になぜ 駒つなぐな

ドッコイ

駒が勇めば 花が散るな

アレハサヨイヨイ

関の小刀 身は細けれとな

ドッコイ

切れた思いが 深うござるな

アレハサヨイヨイ

生ますだけでは わやなけれとな

ドッコイ

塩にもまれて 子が咲かぬな

アレハサヨイヨイ

大井川 (三下り)

大井川にはいかたを流すソレ 吉田川にはな紅葉を流すソレ

そこで二人が浮名を流す オオソウカイナソレ...

三里浜からおいず見ればソレ ちうらうらうと千鳥が通うマカシヨ

そこで舟のり漁師が通う オオソウカイナソレ

ここは名高い新地やなソレ 老も若いも砂持ちさせてマカシヨ

客が終りや芸子が騒ぐ オオソウカイナソレ

橋の上から文取り落しソレ 文は流れる思は沈むマカシヨ

そこで二人が浮名を流す オオソウカイナソレ

離れまいと約束すれソレ 縁の無いか神子の月ヨマカシヨ

五ツながらも浮名を流す オオソウカイナソレ...

石堂橋から柳町見ればソレ 芸子がむろがやたらと騒ぐマカシヨ

そこで客衆が浮名を流す オオソウカイナソレ

薩摩薩摩 (三下り)

薩摩さつまと指しては行けど、やな薩摩の金山に

ほんにさほんにさアアコリヤコリヤなんとしようかいどつしよかい

スツタイヨウニ シヤンセナ

サイも恐りや虎毛の犬よ、村の庄屋さんに吠えかかる

ほんにさほんにさアアコリヤコリヤなんとしようかいどつしよかい

スツタイヨウニ シヤンセナ

肥後の川下によだたが二本、思ひ切ろよし切らぬよし

ほんにさほんにさアアコリヤコリヤなんとしようかいどつしよかい

スツタイヨウニ シヤンセナ

薩摩さきの津に御番所がなくは、連れて行きたや鹿見島に

ほんにさほんにさアアコリヤコリヤなんとしようかいどつしよかい

スツタイヨウニ シヤンセナ

コに繋ぎなはづなも取るな、肥後の高瀬が来て繋ぎ

ほんにさほんにさアアコリヤコリヤなんとしようかいどつしよかい

スツタイヨウニ シヤンセナ

薩摩桜島見事な島よ、地からはえたか、浮島か

ほんにさほんにさアアコリヤコリヤなんとしようかいどつしよかい

スツタイヨウニ シヤンセナ

雉のめんどり (三下り)

雉のめんどりキ、小松の下で、妻をたすねてほろろうつ

アラドツコイテイシヨ 様はよからぞえ、ホツカラカイト コイコイ

踊りおどらばオ、お寺のつぼで、踊るかたて、後生をねがう

アラドツコイテイシヨ 様はよからぞえ、ホツカラカイト コイコイ

志をぬきぬきなり、菜師堂でぬき、菜師や木仙でもの言わぬ

アラドツコイテイシヨ 様はよからぞえ、ホツカラカイト コイコイ

金の座敷でも一人寝はいやよ、様と二人寝の膝まくら

アラドツコイテイシヨ 様はよからぞえ、ホツカラカイト コイコイ

博多小女郎がオ、もろおた子を見やれ、二重障にもろえくぼ

アラドツコイテイシヨ 様はよからぞえ、ホツカラカイト コイコイ

祝い目出度のオ、若松様よ、枝も栄ゆりや葉もしげる

アラドツコイテイシヨ 様はよからぞえ、ホツカラカイト コイコイ

関の地藏さんオ、親よりましよ、一度参れば子がたもる

アラドツコイテイシヨ 様はよからぞえ、ホツカラカイト コイコイ

こちらの座敷はオ、祝の座敷、鶴と亀とが舞いあそぶ

アラドツコイテイシヨ 様はよからぞえ、ホツカラカイト コイコイ

高い山 本調子

一、高い山から谷底見ればなー(ドコヨイ)

瓜やなすびの花盛りなー
あれはさーよいよい(ドコヨイ)

二、沖のと中の三本竹はなー(ドコヨイ)

うす竹やりや子かきかぬなー
あれはさーよいよい(ドコヨイ)

三、園の地藏は親よりさーよな(ドコヨイ)

一度参れば子かたもるなー
あれはさーよいよい(ドコヨイ)

四、安藝の宮島はわれは七里な(ドコヨイ)

浦は七浦七恵比須なー
あれはさーよいよい(ドコヨイ)

五、小石川のうの鳥見ればな(ドコヨイ)

ふなくわえて瀬をのぼるなー
あれはさーよいよい(ドコヨイ)

(2)

(1)

お市後家女

ニ上り

一、お市後家女はな(アードツコイシヨイ)

三年通った通ったそらじやろ
はいしるに子か出来たお市後家女
さーやつとわかえた(アードツコイシヨイ)

二、志賀の島出でな(アードツコイシヨイ)

奈多渡行けばいとそらじやろ
はいとこの相の島お市後家女
さーやつとわかえた(アードツコイシヨイ)

三、安藝の宮島はな(アードツコイシヨイ)

廻れば七里浦はそらじやろ
はい七浦七恵比須お市後家女
さーやつとわかえた(アードツコイシヨイ)

四、博多御女部はな(アードツコイシヨイ)

あちなことおやるな(アードツコイシヨイ)
はいふたにもろなくお市御家女
さーやつとわかえた(アードツコイシヨイ)

(6)

(5)

五、あの子良い子よなりえアードッコイシヨイ

ほたもち顔よなりきなこそうじやろ

ばい付けたらなあよわろお帝後家女

さよやつとわの多たアードッコイシヨイ

宵い也町

水調子

一、宵い也町へ夜中もすきて

引く三味線はアードッコイシヨイ

思わば相とそ相の山

のうこれ手を取る手柄山

お茶菓子に花みどり

二、恋しくばへ尋ね来て見よ

いずみなるアードッコイシヨイ

藤田の森のまわり神

ほあそはやすなの異勤兵衛

お茶菓子に花みどり

(10)

(9)

三、今宵こそへねずみこそつく

晩じやらアードッコイシヨイ

さてこそようこそねられこそ

わうしたこそつく晩じやら

お茶菓子に花みどり

四、色くらへへ京で島原祇園町

大阪で新町場のうち

お江戸で老原菜野

お茶菓子に花みどり

五、田舎にてへはでな娘の厚化粧

素顔で会うたらなんぢやら

風呂屋ぬないのぞごんしやう

お茶菓子に花みどり

(13)

(12)

(11)

